

## ウィーン それから

倉田 稔

### もくじ

はじめに ウィーン 銀行 クルト家 ホイリゲ 銀行で 美術館  
フンデルトワッサー ベトナム料理店 帰り

### はじめに

2018年9月、プラハから列車でオーストリアの首都ウィーンへ向かった。オーストリアでは通貨はユーロで、1ユーロ130円くらいだった。13日、ウィーンに着いた。着いた中央駅は最近できたものである。ウィーンは私は20年ぶりである。ワイフは30年ぶりである。20年も来ていないと、随分変わっている。ウィーンへ行く目的は、友人クルトとジョイ夫妻に会うこと、銀行からお金を下ろすこと、観光を幾つかすることである。ホテルはGetreidemarkt 5のMercure Sessesionだった。

友人クルト、ジョイ夫妻は、『ウィーンの森の物語』NHKブックス、および『ヨーロッパ社会思想 小樽』成文社、で紹介した人である。

### ウィーン

駅ですぐ市内の交通機関の乗車券を買うが、昔とシステムが変わったのだろうか。時間決めの券しかないようだ。駅からタクシーに乗る。一方通行が多いので、ぐるぐる廻る。ホテルの部屋のカードキーがうまく作動しないので、部屋を代えて貰った。ヨーロッパのホテルでは時々あることだ。ホテルでチェーン・レストラン「ウィーナーワールド」の場所を聞いたが、歩いて15分だとかである。もっと近くにあるはずだが、と思う。遠すぎるので、隣のヴェトナム料理店「サイゴン」で夕食をする。私はライス・ペーパーで肉や魚を手巻きにするものだった。

早速クルトに電話した。夜の内に彼らは、ホテルにお菓子を届けにきてくれていた。我々に会わずに。歓迎のサプライズだ。私の好きだったウエハースである。

### 銀行

14日 朝、メイドがクルトのお菓子を持ってきた。電車で銀行へ行く。私が今度ウィーン

へ来た目的の1つがこれである。私は古い預金通帳を持っており、全額引き出しに来たのだ。だが、預金していたクレジット・アンシュタルトは閉鎖していた。休日という感じではない。建物の前のソーセージ売りに聞くと、「閉鎖したよ。二区へ行った」とのことだ。何と云うことだ。オーストリアで1番大きかった民間銀行なのに。折角街中に来たので、行きつけの本屋へ行こうとしたが、見つからなかった。昼食を市庁舎前の広場で食べる。じゃがいもとハムをまぜていたためたものである。何かの企画のために、屋台が10軒ほど出ているのである。飲食の道具、コップ、皿、ナイフ・フォークは前払いであって、注文の際に2ユーロ多く取る。後で返してくれる。おばさんたちはそのことを説明しているが、何を言っているのか、初めは分からなかった。

ホテルに戻って銀行の件を聞くと、クレジット・アンシュタルトはバンク・オーストリア銀行になったとのことであり、組織が変わったとは大変驚いた。そして1番近い支店はオペラ座の横だと教えてくれた。すぐその支店へ行った。女店員と面接する。「ここでは解決できない。外国人部が近くにあり、そこで相談して下さい」と言うのである。銀行通帳が以前の銀行のものであり、40年も前に作り、20年前に使ったのが最後である。うまく解約してくれるか心配である。月曜に係の行員と会う予約をとった。土・日と2日も待つことになった。後に分かるが、バンク・オーストリアはイタリアのメガバンク、ユニクレジット・グループの中核的存在となっている。バンク・オーストリアはもともとレンダーバンクと言った。1997年にクレジット・アンシュタルトを買収し、5年かけて合併した。そしてドイツの抵当連合の傘下となる。2005年にこれがユニクレジット・グループに買収された。現在オーストリアには民間銀行は、オーストリアバンク、ライフアイゼンバンク、エルステバンク、フォルクスバンクがある。かつて1999年に、わがグループでウィーン旅行を一緒にした人が、使い切れなくてシリングを残して日本に帰った。しかしその後、シリングはユーロに替わってしまった。「それでどうにかならないでしょうか」と、数年前に私に相談しに来た。私はクルトにこの問題を聞くと、「オーストリアにきて、シリングをオーストリア国立銀行へ持って行くと替えてくれる」とのことであった。だが、私も、その知人も、当分オーストリアには行かないので、クルトに頼んで代えて貰った。

さてオーストリア国立銀行は、Nationalbankといい、国民銀行とも訳せるが、オーストリアの中央銀行で、株式会社であり、株の七割は政府が持っている。

## クルト家

5時にクルト家へ行くことになった。メトロで1直線でオーバー・サンクトファイトに着いた。ちょっと迷った。というのは駅舎の形が違っていたのである。「降りる駅を間違えたかな」と真剣に思った。いつも乗っていたバスも出発場所が違うみたいだ。「xx通りに行きますか」と運転手に聞くと、無愛想に「行く」とのことである。我々がアジア人だからである。ともかく乗ってみた。懐かしの道を走った。降りる所も1つ間違い、1つ余計に進んでしまった。夫妻2人が日本に来た時、「家の前は交通ラッシュですごい、是非見せたい」と言っていた。しかし時刻のせい、それほどでもない。彼らの家へ着き、ベルを押すと、クルトが出た。ジョイも顔を出す。彼らとハグする。「早すぎるぞ」と言われてしまった。40分も早く着いてしまっ

たのである。ヨーロッパでは約束の時間の数分後に着くのが一番いい、と聞いたことがある。

「お菓子入手したか」とクルト。そうだ、忘れていた。「今朝、ルームメイドが持ってきて、今日入手した。ありがとう。」「変だな、昨日持って行ったんだが」とクルト。「彼女はどのようにして昨日部屋へ持って行かなかったのか」。そうなのだ、このホテルはちょっとサービスの点で足りないところがある。

4人で食事をする。ジョイお手製のもので、以前私がここに居た時、好きだったものだという。よく覚えていてくれたものだ。舌触りの良い団子が入った鶏ガラのスープと、細切れ仔牛の煮こみと、煮た米、いわゆる外米である。牛肉は高いので日本ではなかなか買えないが、ウィーンでは安い。それに柔らかい仔牛肉が売られているので、とてもよい。団子はきびのような粉を牛乳と混ぜて作る。この粉をワイフは後にスーパーで入手した。ビールが多種類出た。アプフェルシュトルーデルもご馳走になる。ジョイがオーマ（おばあさん、つまりクルトの母）から教わったのだ、「しかし今ではオーマのより上手だ」と、クルトは言う。「ホームメイドというわけだ」と。「アプフェルシュトルーデルって、りんごパイのことか」と、ワイフが言う。

お土産に日本でジョイにあげたガラスの花瓶が、部屋に飾られていたそうだ。その花瓶をとても気に入って、喜んで使ってくれている。ジョイさんには押し花のついた小樽のオルゴールをプレゼントした。クルトへかつてお土産にした暖簾は使っていなかった。あるいは我々には見えなかったのかもしれない。今回お土産に小樽運河のガス燈を形どったステンドグラス風の壁掛けを持っていった。「小樽運河を覚えているか」と聞くと、「覚えていない」と言う。それはそうで、我々は小樽運河へ彼らを案内していないのだ。というのはヨーロッパ人に小樽運河を見せても、ヴェネチアやアムステルダムに較べたら何でもないので、連れて行かなかったのである。

もともとクルト夫妻と私が暮らした家は今は娘のカーリンが使い、オーマ（クルトの母）の家を夫婦が使っている。オーマの使った台所は改装したという。ここで食事をした。オーマは年を取ってから食事の支度ができなくなり、隣のクルトの家へ食事をしに来る生活になった。ある時、いつものように夜になり、明け方、ジョイがオーマの部屋に入ったら、静かに亡くなっていた、という。苦しまなかったみたいだ、と。

昔の思い出話が出た。楽しい1年だったと言い合う。年金額の話になった。オーストリアでは、公務員と私企業勤務者とは年金額が違う、と。日本と同じようだ。クルトは、我々の年金額だけ聴いて、自分たちの年金額は答えなかった。大体普通はヨーロッパでは20万円である。ただし彼ら夫妻は共稼ぎだったので、多いだろう。年金は、大学教授は、ドイツやオーストリアだったら私の倍だという。そう言って嬉しそうである。今回の旅行費用も聞かれた。「オーストリア経由で計画したらよかったのに」と、クルトは、ワイフに言っていた。つまり飛行機はウィーン往復とし、ウィーンを起点にプラハを列車で往復する方が安いというわけである。

彼らの部屋を見せてくれた。私が10ヶ月いた屋根裏部屋も見る。なつかしい。クルトとジョイの若い時の写真がある。「ジョイ、綺麗で好い写真だ」と言うと、「今はこんなになっちゃったわ」と応ずる。ジョイの仕事部屋も見る。庭は2つある。オーマの所有の庭が加わったからである。私の銀行預金の話になった。「月曜に一緒に行くよ」とクルトは言ってくれた。

ワイフはクルトに年齢を聞くと、年の話はしないのだ、との答えだった。ただし彼らが小樽に来た時、クルトは私にワイフの年を聞いたのだ、とのことである。

ビールの話になった。クルトは、ベルギービールが世界で1番おいしいと、かつて言った。

私は昔ベルギーへ行った時、とある旅行者用ビアガーデンでビールを飲んだ。非常においしかった。今までのうち1番おいしかった。一方で、日本で近年、原莊介（ギタリスト）さんに会った（著書『男のララバイ』藤原書店、を出している）。彼はベルギーにいつも滞在している人であり、「チェコビールが世界一だ」と言う。そこで私は、チェコへ行った際、比較のためによくビールを飲んだのである。しかし私の飲んだベルギー・ビールの方がおいしかった。勿論、飲む場所、個人の好み、その人の状態にもよるだろう。

「アメリカへ行ったことあるか」とクルト。「いや、ない。銃社会だから怖い」「そんなことはない、大丈夫だ」。ワイフが30年前にここに泊まったと言うと、「本当か？」と言う、「忘れていた。確かめてみよう」と、ゲスト・ノートを持ってきた。大変立派な部厚いノートブックで、私も見覚えがある。自分の家を訪問してくれた人に一筆書いてもらっているのである。そこで30年前の場所を見ると、私がドイツ語で一筆書き、ワイフが名前だけサインしていた。「やあ、そうなんだ、来ていたんだ」となった。今回も訪問したので、それぞれ2人で一筆書き込んだ。

クルトは「車でメトロへ送るよ」、と言う。駅の様子が違ったと言うと、「そんなことない、フランツ・ヨーゼフ（皇帝）の時代と同じだ」と冗談を言う。やはり昔と違って出口が2つになったていた。ここでは飲酒運転は自己責任である。

## ホイリゲ

15日 朝食後 ポストへ郵便用の箱を買いに行き、2つ買った。スーパーにも寄り、チョコレートも買う。私は電車で美術館へ向かい。ワイフは、枕店へ行った。具合の良い枕を買いたいというのである。夕5時にクルトが車で迎えに来て、ホイリゲへ向かう。ホイリゲとは、新酒を出し、庶民的で、ワインや料理が安く、美味しい店のことである。ワイフは疲れたので、夜の外出は控えることになった。クルトを傷つけないように理由を言っておいた。夫妻の娘のカーリンも参加した。何年ぶりだろうか、とても綺麗になっていた。大学を出て、ウィーン市内で勤めている。

行くべきホイリゲは車で1時間ほどかかる。中央駅を通った。前述のように新しい鉄道駅だが、ここは大変広いので、土地を買収するので大変だった、おカネが乱れ飛んだ、という。道中、色々喋った。着いたところは田舎のホイリゲである。家族経営である。「家の近くのフィルミアンガッセのホイリゲは悪くなっている、つまりレストランになった。それに高い」とクルトは言う。「ここはとてもよい、値段が安く、質がよい」と。ミュンヘンドルフという小綺麗な村だった。この人々の多くはウィーンに勤めている。農民はいなくなって大地主だけだ、と。席に着いて、食事を注文する。私はなぜか豚のシュニッツエルだ。カーリンに日本の絵葉書をあげたので、それを全部説明することになった。隣にジョイがいて、「フィリピンの大統領面白いね」と言ったら、「好かない」と。友人から情報を得ている、と。ポテト・サラダのポテトが新鮮でとてもおいしかった。自動車が沢山来ている。時間が早いせいか、まだ客は少ない。結婚後の食事会が行われていた。郊外で車で来てこういう食事をする時、飲酒なしであったら、つまらないだろう。クルトは少しワインを飲んだ。ここはハンガリーかと聞いたら、「とんでもないオーストリアだ」と。ハンガリーはビールはまずい、と。

16日 ホテルで、ホテル・ザッハーのカフェへ予約を頼んだ。この時フロントへは電話だったので、何だか小難しい事を言われ、私はよく分からなかったのである。これが失敗のもとだった。ホテル・ザッハーへ行く。ザッハートルテを買う。これを郵便で送って貰う。送れない種類もある。終わってカフェ部へゆく。ホテルに予約を頼んでいたが、予約が入っていないみたいだった。だから20分は待つことになった。我々はやっと入って、私はザッハートルテ、ワイフはクレープを注文した。久しぶりである。古風なカフェである。その後、ケルトナー通りを歩いて、翌日の銀行の場所を確認した。鶏のレストランで有名な「ウィーナーワルト」もあった。今晚来よう。初日にホテルのフロントは違う場所の店を教えたようだ。日曜なので、通りの店は一部しか開いていないが、ワイフはお土産のチョコレートを買う。一度ホテルへ戻って出直し、「ウィーナーワルト」へ行った。ここはリンツでよく利用したチェーン店で、鶏料理で有名である。安くて量が多くて美味しかった。鳥のカツとグリルを頼んだ。メイン料理でお腹が一杯となり、デザートはもう食べられないので、取らなかった。

## 銀行で

17日 郵便局で荷物を出す。7kg余で、航空便である。銀行へ向かう。クルトはすぐ来た。銀行内の部屋で、3人で、男性係員と話し合いとなる。パスポートも出すようになる。通帳は無記名だと思っていたら、記名してあった。オーストリアでは無記名でもよいのである。話の途中で「日本の納税者ナンバーを教えよ」と言われる。困った、その場では分からない。結局、彼はポストと相談することとなり、また戻ってきた。合計2時間で解決した。納税者ナンバーを教えなくても済んだ。利子計算の新しい書類と共に、私に預金額が払われた。この時、勿論クルトは、私に許可を取ったのだが、余ったおつりのコインを銀行員にチップとして渡そうとした。私は驚いた。銀行員相手に、と。銀行員は受け取らなかった。私は、「オーストリアでは銀行員にもチップを出すのか」と聞くと、「昔はね」とクルト。彼はこのお金を、シュテファン寺院にお賽銭として寄付したら、とワイフに渡した。無信心なはずなのに面白いことをするな、と私は思った。ワイフは、そこまでの事情は知らなかったので、クルトがお金をくれたのかと思ったそうだ。それで寄付してしまった。後で、私のお金だと分かった。さて、ジョイも遅れてくるはずで、我々とクルトは彼女を待ったが、来ない。丁度12時になった。「昼はどうする」、とクルトに聴くと、昼は食べないとのことだった、そこで、道路ぎわに出ている菓子店「アイーダ」のテントの下でお茶をすることにした。「アイーダ」は有名なチェーン店で、アイスが美味しい。ケーキもコーヒーもかなり美味しい。ワイフは紅茶、私はコーヒー、クルトはアイスをとった。チョコアイス2つ、美味しいそうだ。ジョイが来ないので、「まさか」と思って、クルトは家に電話をすると、彼女は家に戻っていた。クルトは怒っていた。「女はこれだから」と言っていた。後でワイフに聴くと、「当然だ、2時間も1人でぼんやりと待つことはない」と。クルトは、「コーヒーでも頼んで、ここで待ってればいいじゃないか」と言う。

ここはウィーンで1番いい所である。クルトも「ここに居るといふこと自体がすばらしいよね」と。なにしろ、ウィーンを中心シュテファン寺院の隣りなのだ。

クルトと別れ際、オーストリアで最もおいしいチョコレートの店「デーメル」を推薦され、我々

は行こうとしたが、場所を忘れ、わからなくなった。とにかく昼食にした。昔行ったことのあるチェーン店レストランに飛び込んだ。ワイフにウィーナーシュニッツェルと、私にターフェルシュピッツをとった。野菜を注文したら量がとても多かった。ゆでた野菜で、おいしい。店を出てデーメルへ向かう。場所を聞きながら行く。デーメルの内部は昔と少し変わったのではないか、と思う。外にもテントが出ている。コーヒーとともにケーキを店内で食べようとしたら、客が多いので空席がない。「階上へ行け」と言われ、行ったが、待たされそうなので、とりやめた。テイクアウトにした。ホテルで食べたら、とても美味しかったが、大きくて1人では食べ切れない。テイクアウトにしてよかった。昔はこんなに大きくなかったのではないかと思うが。後に、クルトは、デーメルのチョコレートは高いから自分たちには買うのは「不可能」だと、ワイフに言っていたそうだ。私が直接聞いてれば、プレゼントしていたのに。

## 美術館

18日 リヒテンシュタイン美術館に再び行く。というのは2日前、ホテルで場所を聞いて、私は出でかけたのだ。フロントは事実上の間違いを教えた。メトロで行けると言うのだった。実際は電車の方が良い。路線D一本で行けるのだった。メトロでは着いた駅から15分くらい歩く。市電ならすぐ前に着く。美術館は2日前は入れなかったの、こんどはフロントに開館時間を聞いてから、出かけた。邸内に入ると、それでもやっていない。外国の観光団がいて、その女性ガイドがいたので、聴くと、特別の日しか開いていない、今日は開いていない、とのことだった。「我々はだから邸の外側だけ見に来た」と言う。これには困り、折角2度も来たので、何とかしたいと思った。邸内を歩いている地元の人らしい初老男性に聞いてみた。すると、市内にそれぞれ邸と美術館とがあり、ここは夏の宮殿で、かつ美術館もあるという。つまり4つあるわけである。開館、参観日は、日が決まっていると言う。彼と別れて、庭に案内板があったのでよく見ると、市内の宮殿と美術館、ここの宮殿と美術館の開館日と案内時間が書かれてあった。同じ日に行なわれるみたいである。1ヶ月に2回くらい開館されるようである。これで今回は見られないことが分かった。それでも残念で、邸内に管理棟があったので、ブザーを押して女性係員と話した。まったくその通りで、どうしようもない。素晴らしい本を見せてくれたので、これは買えるかと聞くくと、「ここでは売れない。インターネットで入手できる」とのことだった。近くの棚に、パンフレットがあったので、聞くと、「買える」と言う、そこで2つの場所の案内パンフレットと、綺麗で大きな絵葉書を買入れた。私は、ホテルのフロントに、美術館の開館時間がコンピューターでは間違っていた、と伝えた。

## フンデルトワッサー

二つ目の予定のフンデルトワッサー・ハウスに行く。市電で行く。ラデツキー・マルクトで降りる。旅行本にはそうあったが、もう1つ駅を先に進んだ方が良い。この近くにはフンデルトワッサー・ハウスとクルツァ・ハウスがあり、初め前者に行った。フンデルトワッサー（1928－2000）は、ウィーン生まれ、母がユダヤ人だった。父がなくなり、1938年からユダヤ人街

で生活した。第二次大戦後、画家を志した。アフリカで学び、ウィーン美術アカデミーに入り、その後、その教授になる。直線を拒否し、多彩な色を用い、住宅を設計し、自然を愛した。ハプスブルク最良であった。

行く目的のマンションの2棟が画家フンデルトワッサーのデザインによるものだった。地上階にカフェがあり、ここのテレビ映画をみながら、冷たいコーヒーとアプフェルシュトルードルを食べる。クリームソースとアイスクリームがついている。周辺を写真に撮る。売店でフォト集を買う。多くの見学者が来ている。マンションの外壁を、青、黄色、金、銀、赤で色づけしてある。こういう家に住みたいと思う。

ここを去り、しばし歩いてクルツァ・ハウス（文化の家という意味）に寄る。2つの美術館が一体であって、5階建てだが、フンデルトワッサー美術館にだけに入る。彼の絵は仲々良く、気に入った。ポスターを買おうとしたが、持って行くのが大変なのでやめた。クルツァハウスの建物もフンデルトワッサーのデザインで、家々の外側が多彩色で塗られている。

市電で帰り、ワイフは、ホテルの近くの絨毯などを売る店で、トルコ経由の純綿の鞆を買う。毎日気になっていたようだ。ワイフは、ホテル・ザッハー問題でフロントを問い詰めて、「どうして予約しなかったのか。我々は20分も待った。こちらが悪いのか、貴方が悪いのか」と言っていて、ホテルが悪いと謝らせた。そこでフロントは「マダム、こちらで、お座りになって、ジュースでもいかが」と言われたそうだが、断ったとのこと。

朝食時にセンメルを見つけた。なつかしのパンだ。何の変哲もない小さな丸パンである。それから毎日それを食べるようになった。

## ベトナム料理店

夕6時、クルト夫妻と、ホテルの隣にあるベトナム料理店「サイゴン」で夕食をした。カーリンがここを知っており、クルトが入りたいと思ったようだ。カーリンも途中参加した、ディスコの帰りだった。カーリンは、クルトをディスコへ連れていかないよ、とのことだった。当然であろう。クルトは自分の箸を箸箱に入れて持って来た。焼きソバを注文している。彼は焼きそばが好きなのだ。ワイフは汁入りの麺で、私は前回と同じ物をとった。ジョイさんに、「君は国際結婚をしたわけだが、どうだった」と聴くと、「とにかくクルトはむずかしい男だからね」とのことだった。ポリシーをもっている人とだから、難しいのはあたり前だろう。

クルトたちが日本に来た時、原発メルトダウンの年だったので、原発の話になった。「オーストリアは国民投票で原発廃止と成り、えらいなあ」と言うと、「そう、ブルーノ・クライスキー（首相）の時ね。だけど、投票は49%対51%だった」と。クライスキー（1911-1990）は大変有名な首相（在職1970-83）で、初のユダヤ人首相。社会党所属だった。

ジョイは、一度流産し、その後、カーリンをみごもった。出産予定が近づいた。その時、医師は、「その時期は私の休暇期間だ、スキーに行くのだ、休暇は動かせない、そこで出産時期を早めるしかない」と主張した。そこで、帝王切開をすることにした。これで出産日を早めたというのだった。お陰でジョイは、子供はカーリン1人となった。我々はびっくり仰天であった。担当医を替えたらどうか、とか、後で私は考えたものだが。ウィーン人はこれに納得するらしい。

「僕の本の三分の一はクルトたちの話であり、その部分をメールで送ろうか。翻訳ソフトでドイツ語になる。」という「駄目だ、単語だけの翻訳だ」と言う。ソフトがオーストリアではまだよく開発されていないのだろうか。

私はジョイに言った。「オーマ（おばあさん、ジョイの姑）は、私は心温かい娘をもっている、と言っていたよ」と。ジョイは「そんなことは信じられない」と手を振った。かつて30年前に同じ事を私は言ったのだが、「えッ、私には言っていなかったよ」という反応だったが、今回は全然違っていた。30年の間に何かあったのだろうか。

食事の最後に、デザートとしてバナナの天ぷらをカーリンはとった。「やあ、なつかしい。」かつてウィーンにいた頃、カーリンはこれをデザートとしてよくとっていて、私も食べた。中華料理店のデザートであった。ヴェトナム料理店はこれをマネしたのだろう。私はクルトに「これが最後のウィーン訪問だ」というと、「大変結構だ」と、クルトは応じる。この度は全く感傷的ではない。七年前、札幌駅で別れた時は目を赤くしていたのに。会計で「私が払う、銀行問題でお世話になった」と、私はねばったが、とうとう押し切られた。

クルトは、我々のウィーン滞在中、2カ所素晴らしい所があるから、車で連れて行って上げると言ってくれていた。だが、銀行問題や何やらで、七日間もいたのに、時間がとれなかった。残念だった。

## 帰り

19日 ウィーン空港へ旅行社の車で向かう。まだシュヴェヒアート空港と言われるようだが、少し大きくなったようでもある。空港内の売店で、ザッハー・トルテが売られていた。ちょっと安い、本物かといぶかしたが、1つ買った。飛行機を待っている時、隣の日本人男性がザッハーの本物の紙袋を持っていたので、「待てよ、我々の買った物にこんな綺麗な紙袋がなかった」と気づき、ワイフは売り場にまた戻って販売員の中年女性に聞いた。「これは本当のザッハーか」。彼女はきっぱりといわく、「これは本物ではない」と。ニセモノが堂々と売られているのだった。それでも後日、日本で食べたのだが、まずいものではない。

ウィーンからヘルシンキまで飛行機で昼食が出なかったの、ヘルシンキ空港でサンドウィッチを買い、飲み物としてビールを注文したら、デンマークの名酒カールスベルグだった。よかった、おいしい。20日朝8:05に成田空港に着いた。

成田空港で荷物を北海道まで送ろうと思ったが、北海道胆振東部地震の影響で、荷物の配達が遅れていると言われ、仕方なく自分たちで持ってきた。我々は北海道のブラックアウトを経験しなかった。